

山内功一郎著『マイケル・パーマー
オルタナティヴなヴィジョンを求めて』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会編集部 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009371

山内功一郎著

『マイケル・パーマー オルタナティヴなヴィジョンを求めて』

編 集 部

マイケル・パーマーは、現在のアメリカを代表する詩人の一人である。一般的に「言語派」の詩人と見做されているが、マイケル・パーマーの世界は幅広く、言語による様々な実験性に富んでいる。言葉における流暢な音楽性とラディカルな表現技法は「反詩」的な雰囲気さえ漂っている。しかし、こうした彼の試みは、一方では自己の根源的な伝統に即しながら、他方では現代の普遍的な抒情性をも強く醸し出している。



マイケル・パーマーは、1943年、イタリア系アメリカ人としてニューヨークで生まれている。マイケル・パーマーの成長期は、第2次世界大戦に勝利したアメリカの戦後において、ちょうど資本主義による物質万能主義が絶頂を極めていた時期と重なる。生まれ育ったニューヨークはその象徴的な場所でもあろう。こうした環境がマイケル・パーマーの思想や詩的感受性に多くの影響を及ぼしたことは言うまでもない。文明に

対する懐疑、物質資本主義に対する違和感、既存秩序への反感等々のマイケル・パーマー世界の基本骨格は、こうした時代と空間に無縁ではない。

もう一つは、見逃してならないことは、伝統の問題である。マイケル・パーマーの抵抗と詩的争闘は、たんにラディカルな文明批判ではなく、彼の中に巣くっているイタリア系アメリカ人としての伝統とその再構築・再演が見られることである。イタリアの伝統がマイケル・パーマー詩世界における根源的な「救い」として、隠微なかたちで現れたりするのである。それはイタリア中世の文化であったり、宗教（ダンテ『神曲』）であったりする。そのため、反詩的なラディカル性を持ちながらも抒情性を臨界地点にまで煮詰め合うという矛盾が同居する。資本主義の極点である1960年代のニューヨークの日常に、中世のイタリア的な時間が同時に流れる。つまり、マイケル・パーマーの詩世界はつねに

単一的でないのである。山内氏の言う「オルタナティヴ」的なのである。たんに閉ざされた破壊と抵抗ではなく、つねに新たな「ヴィジョン」を両有するのである。山内功一郎氏が副題を「オルタナティヴなヴィジョンを求めて」としたのはこうした所以であろう。

本書は3部6章構成である。第Ⅰ部は「言語の工作者」、第Ⅱ部は副題にもなっている「オルタナティヴなヴィジョンを求めて」、第Ⅲ部は「資料編」となる。さらに詳細に紹介すると、第Ⅰ部は「第一章 「アフター・ダンテ」のパラドックス」、「第二章 「神秘的なもの」を示す言語ゲーム」、「第三章 潜勢力、言語、太陽」と構成される。一方で、第Ⅱ部は、「第四章「権力との自己同一化を超えるなにか」のために」、「第五章 ランプに火を灯す詩人たち」、「第六章「誰でもないもの」の声が生じるとき」となる。それに資料編が加わり、マイケル・パーマー詩世界のほぼ全容が明らかにされている。

マイケル・パーマーの研究は日本では盛んとはいえないが、その指南書として、また本格的なマイケル・パーマー論として、本書の意義は高い。併せて紹介したいのは、山内功一郎訳・マイケル・パーマー詩集『粒子の薔薇—マイケル・パーマー詩集』（思潮社、2004）である。山内功一郎氏の一連の作業である。マイケル・パーマーの実作を読んで本書を読むことは順序としてよい。しかし、本書を読んで実作に目を通すことも可能で、どちらかすると、後者がお勧めである。

（2015年12月25日 思潮社 279頁 3,000円＋税）